

【 2 】

氏 名	柴 山 英 一 しば やま えい いち
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 84 号
学位授与の日付	昭 和 48 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	マキァヴェリの歴史的研究序説

(主 査)
論文調査委員 教 授 前川貞次郎 教 授 越智武臣 教 授 今 津 晃

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序論と本論からなる。序論においては、(一)本論文の問題提起および要旨、(二)ニコロ・マキァヴェリの政治思想素描が試みられているが、著者はここでマキァヴェリの政治思想を多面的・総合的にとらえ、また当時のイタリア・ルネサンス期の歴史的状况と関連させて考察する歴史的立場から、マキァヴェリ理解に接近すべきことを強調し、従来の研究が「君主論」一辺倒であった点を批判し、「君主論」以外の著作、「ローマ史論」・「戦術論」・「フィレンツェ史」などの他に文学作品や公私の書簡などにも依拠して究明することの必要性を主張する。

本論は二部からなるが、第一部はマキァヴェリ研究史にあてられている。著者は16世紀から現代にいたるまでのマキァヴェリに関する代表的な見解を紹介しつつ、論評を加えているが、著者によると、19世紀にいたるまでのマキァヴェリ評価には非難と弁護の二つの立場がみられるが、いずれも一面的であり、全面的な理解のためには、巨視的な歴史的考察が試みられなければならないとする。そして、とくに最近20年間(1940～1960)におけるマキァヴェリ研究の状況を、(1)政治思想、宗教、倫理、道德観、(2)問題の処理方法、(3)思想の表現の問題、(4)他の思想家との比較、(5)「君主論」・「ローマ史論」の内容と構成の諸問題、に区分してきわめて詳細に紹介している。そして最近のこのおびただしい研究にもかかわらず、依然「マキァヴェリの謎」は解決されておらず、その解決のためには、これらの研究の成果をふまえて、マキァヴェリの諸作品を検討し直す総合的な把握が必要であることを強調する。

本論の第二部で、著者は第一部の研究史の成果をふまえつつ、マキァヴェリの代表的四大著作、すなわち「君主論」・「ローマ史論」・「戦術論」・「フィレンツェ史」の他、文学作品や書簡などに立脚し、当時のイタリア内外の政治状況、フィレンツェ市の政情などに関連させつつ、マキァヴェリ政治思想の特質の究明を試みている。まず彼の家系、家庭環境、交友関係、学識教養など、私生活と簡単な伝記的考察を行ない、マキァヴェリ思想形成の過程を、彼の生きたイタリア・ルネサンスの時代的背景と関連させて考察し、人文主義の影響など、従来ややもすれば軽視されてきた思想形成に及ぼす私生活の重要性を強

調する。

ついで著者はマキアヴェリの思想を、ダンテやマルシリオなどの政治思想と比較して、イタリア・ルネサンス政治思想史上に位置づけ、中世的な政教論争の延長としてよりも、近代的政治学の先駆的な性格をもつ点を明らかにし、また同時代のグイッチャルディーニの政治思想との対比を通じて共和主義的色彩が強いことを強調する。

政治と軍事とは不可分であるとの立場から、著者は、マキアヴェリの軍事観を、その「戦術論」を中心に詳しく解説し、とくに彼が傭兵制度を批判して、民兵制度を高く評価している点に、マキアヴェリの共和政を理想とする思想傾向のあらわれを認めている。ついで彼の政治思想そのものの分析にうつり、まず彼の生きた時代的背景、とくに祖国フィレンツェ市の政治状況の推移を詳細にあとづけ、愛国者としてフィレンツェ市の危機に対処しようとするマキアヴェリの姿を描き、そこに「君主論」成立の動機をみている。著者によれば、従来の研究の多くは、もっぱら「君主論」を中心に試みられたが、この著作は、16世紀初頭のイタリアやフィレンツェ市の政治的危機に対応するために書かれたもので、決して政治についての一般的理論を提供したものではないとする。そしてここに見られるものは、あくまでも人間を現実的にとらえた彼の思想の現実的な一面にすぎないという。

マキアヴェリの政治思想の特質は「君主論」よりもむしろ「ローマ史論」や「フィレンツェ史」にみられる共和政思想にあるのではないかとする著者は、これらの作品や私信、さらには文学作品の綿密な分析を通じて、この特質の究明を試みている。とくに著者が最も力を注いでいるのは、マキアヴェリの政治思想の根底をなすものとみなしているヴィルトゥ *virtū* とフォルトゥナ *fortuna* の両概念の解明である。主要作品の中で、この二つの概念がどのような意味内容で用いられているかを、詳細に具体例をあげて解説し、マキアヴェリはこの相対立する概念を使って、人間が環境や事態に積極的に対応し、それらをコントロールできる力としてのヴィルトゥの優位を強調していると考え、そこに祖国の救済を熱望する彼の政治思想の特色の一つがみられるとしている。

さらにマキアヴェリの政治思想の中でも最も問題となる君主思想や共和思想についても、著者は上記の諸作品を綿密に検討して、「ローマ史論」に展開されたローマ共和政こそ、彼の政治理想であり、そこに彼の政治思想の本質があると結論している。

なお巻末には付録として、「マキアヴェリの略年譜」と、きわめて詳しい「内外における主要なマキアヴェリ研究関係文献一覧」が付せられており、とくに後者は、今後のマキアヴェリ研究に不可欠な文献リストとして有益なものであろう。

論文審査の結果の要旨

マキアヴェリの政治思想に関する研究は、わが国においても決してすくなくはない。しかし、それらの多くは、主として「君主論」に依拠したもので、その解釈も総合的とはいえなかった。これに対し本論文の著者は、「君主論」の他に、「ローマ史論」、「フィレンツェ史」、「戦術論」などの代表的著作や文学作品、書簡、報告などに基づいて、彼の思想を詳細に検討し、これを当時のイタリアを中心とする国際政治状況やフィレンツェ市の政治情勢などと関連させて究明し、さらにイタリア・ルネサンス期の政治思想史

の中に位置づけるなど、総合的歴史的考察を試みている。この問題処理の方法と努力は高く評価される。

この方法によって著者が到達した結論は次のようである。すなわち、「君主論」はあくまでも現実の危機に対応するために書かれた書物であり、これに対し、「ローマ史論」はまさにマキアヴェリの政治理想に立脚した作品で、ここに共和政を理想とする彼の政治思想の特質が認められると。マキアヴェリの政治理想を君主政よりもむしろ共和政にみるこの結論そのものは、かならずしも著者の独創とはいえないが、おおむね妥当な見解である。

しかし、この結論にいたるまでの著者の問題処理方法にみられる総合的歴史学的な操作と、最近における諸外国の研究成果を多く摂取している点は、本論文の特色として高く評価すべきであろう。40年の永きにわたる真摯な研究の結晶ともいべき本論文は、わが国における本格的なマキアヴェリ研究の基本的文献として、将来のマキアヴェリ研究や、ひろくイタリア・ルネサンス研究に寄与するところ大なるものがあると考えられる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。